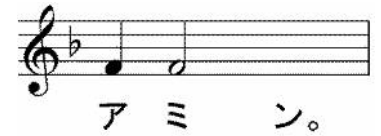


— 新年感謝祈禱 —

釧路ハリストス正教会 管轄司祭ステファン内田
2013年12月31日 編集
2024年12月31日一部改訂

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



てんの おう な ぐ さ む る も の よ 、 しんじ つ の
天 王 慰 者 眞 實

し ん、 あ ら ざ る と こ ろ な き も の 、 み た ざ
神 在 所 者 満

る と こ ろ な き も の よ 、 ばんぜんの ほ う ぞ う な
所 者 萬 善 寶 蔵

る も の 、 せ い め い を た も う の し ゅ よ 、
者 生 命 賜 主 よ 、

き た り て わ れ ら の う ち に お 居 り 、 わ れ ら を
來 我 等 中 居 我 等

も ろ も ろ の け が れ よ り い さ ぎ よ く せ よ 、
諸 穢 潔

し ぜん しゃ よ 、 わ れ ら の た ま し い を す く い た 給
至 善 者 我 等 靈 救 いた 給

ま え 。

誦經) せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を
ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天
おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら
に行わるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に
おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我
ら きょうあく すく たま
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

誦經) アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

きた われら おう しみ こうはい
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう しみ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう しみ まえ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第64聖詠 】

かみ ほめうた おい なんぢ ぞく ちかい おい なんぢ つくの
神よ、讚頌はシオンに於て爾に屬し、盟はイエルサリムに於て爾に償われん。

なんぢ きとう き およそ にくしん なんぢ はし つ ふほう おこない われ か なんぢ われら
爾は祈禱を聴く、凡の肉身は爾に趨り附く。不法の行は我に勝ち、爾は我等

つみ きよ なんぢ えら ちか なんぢ にわ お もの さいわい われら なんぢ
の罪を淨めん。爾が選び近づけて、爾の庭に居らしむる者は福なり。我等は爾の

いえ なんぢ せいでん ふく あた ぎはん おい おそ べ もの かみ わ きゆうせいしゅ ち
家、爾の聖殿の福に飽き足らん。義判に於て畏る可き者よ、神、我が救世主、地の

しきよく とお うみ おもの たのみ そのちから やまた けんとう おもの うみ さわぎ
四極と遠く海に居る者との恃よ、其力にて山を建て、權能を帯ぶる者よ、海の騒、

そのなみ こえ およ しよみん みだれ しづ もの われら き たま ち はて おもの なんぢ
其波の聲、及び諸民の亂を鎮むる者よ、我等に聴き給え。地の極に居る者は爾の

きゆうちよう おそ なんぢ あさゆう おこ なんぢ さんえい なんぢち のぞ そのかわき
休徴を畏れん。爾は朝夕を起して爾を讚榮せしめん。爾地に臨みて、其渴を

とど ゆたか これ と かみ ながれ みづみ なんぢこくもつ そな けだしか ごと これ
 止め、豊に之を富ましむ、神の流には水盈ち、爾穀物を備う、蓋此くの如く之
 つく なんぢそのたみぞ の そのつちくれ たいら あめ したり もつ これ やわ しゆくふく
 を作り、爾其畷に飲ませ、其塊を平げ、雨の滴を以て之を柔らげ、祝福
 め いだ なんぢ おんたく もつ とし こうむ なんぢ あゆみ あぶらしたた すなわちのべ
 して芽を出さしむ。爾の恩澤を以て年に冠らせ、爾の歩には膏滴る、即郊邊
 まきば したた おか よろこび お くさはら けもの むれ き たに こくもつ おお よろこ
 の牧場に滴り、丘は喜を帯ぶ、草原は獸の群を衣、谷は穀物にて蔽われ、歡び
 よ うた
 呼びて歌う。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの
 我等安和にして主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しさい そんびん
 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの
司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こうち お もの ため しゅ いの
司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



じれん もつ われらふとう ぼくひ いま かんしゃ きとう そのてんじょう さいだい う こうおん
司祭) 慈憐を以て我等不當なる奴婢の今の感謝と祈禱とを其天上の祭臺に受け、宏恩
なるに因りて我等を憐むが爲に主に禱らん、



よ われら いのり い われら そのしゅうじん きよねん うち おか じゅう ふじゅう
司祭) 善く我等の禱を納れて、我等と其衆人とに去年の中に犯しし自由と不自由との
ことごと つみ ゆる ため しゅ いの
悉くの罪を赦すが爲に主に禱らん、



じんあい おんちょう もつ こんねん はじめ そのひ おく ふく くだ てんか たいへい き
司祭) 仁愛の恩寵を以て、今年の始と其日を送ることとに福を降し、天下の泰平、氣
こう じゅんわ およ われら ざいか そうけん まんぞく いのち わた たま
候の順和なること、及び我等に罪過なく、壮健に満足して生を度ることを賜わが
ため しゅ いの
爲に主に禱らん、



われら つみ よ およ ぎ かな われら のぞ いかり や ため しゅ いの
司祭) 我等の罪に依りて、凡そ義に稱いて我等に臨む怒を遏むるが爲に主に禱らん、



司祭) およ たましい がい よく やぶ ふうぞく われら とお かみ おそ おそれ わ
凡そ 靈 を害する慾と敗れたる風俗とを我等より遠ざけ、神を畏るる 畏 を我が

こころ い そのいましめ おこな ため しゅ いの
心に納れて、其 誠 を行わしむるが爲に主に禱らん、



司祭) ただ たましい われら うち あらた われら じゅんせい おしえ かた ぜんじ おこな そのおよそ
正しき 靈 を我等の衷に改め、我等を醇正の教に固め、善事を行い、其 凡

いましめ まも ねつしん もの な ため しゅ いの
の 誠 を守るに熱心なる者と爲すが爲に主に禱らん、



司祭) およそ いたん ぎきょう ほろぼ あまね ところ じゅんせい おしえ けいけん う つ およ せい
凡の異端と歧教とを滅し、遍き處に醇正の教と敬虔とを植え付け、凡そ正

きょう そむ もの しんり し てん かれら せい きょうかい あわ ため しゅ いの
教に背きし者を眞理を知るに轉ぜしめて、彼等を聖なる教會に合すが爲に主に禱

らん、



司祭) せい きょうかい われらしゅうじん およそ うれい わざわい いかり あやうき およ ことごと
聖なる教會と我等衆人とを凡の憂愁と、禍害と、忿怒と、危難、及び 悉く

み み てき のが そのしんじゃ そうけん ちょうじゅ へいあん たま しょてん
の見ゆると見えざる敵より脱れしめ、其信者に壮健と長壽と、平安とを賜い、諸天

し しゅご もつ つね かれら まも ため しゅ いの
使の守護を以て常に彼等を護るが爲に主に禱らん、



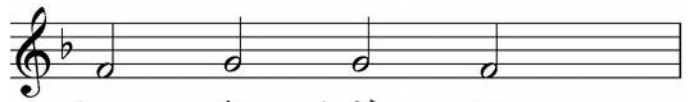
司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

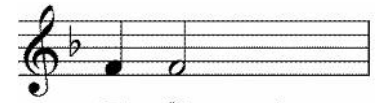
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に 悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

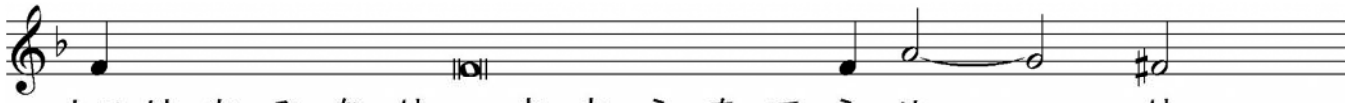
司祭) ^{けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 主は神なり 第4調 】

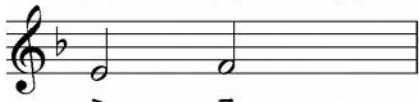
司祭) ^{しゅ かみ われら てら しゅ な よ きた もの あが ほ} 主は神なり、我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
主 神 我 等 照

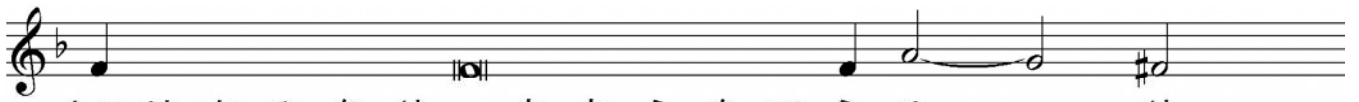


しゅ の な に よ っ て き た る も の は 、 あ が め ほ め
主 名 依 来 者 崇 讃



ら る 。

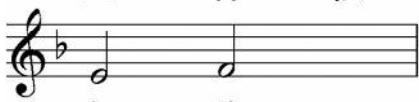
司祭) ^{しゅ さんえい けだしかれ じんじ そのあわれみ よよ} 主を讃榮せよ、蓋彼は仁慈にして、其憐は世にあればなり。



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
主 神 我 等 照

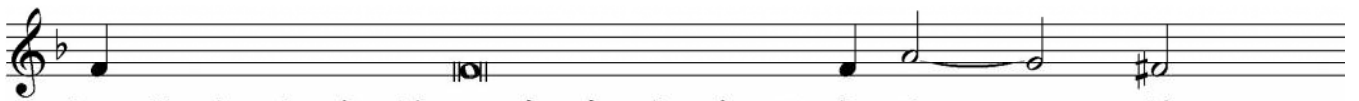


しゅ の な に よ っ て き た る も の は 、 あ が め ほ め
主 名 依 来 者 崇 讃



ら る 。

司祭) ^{かれらわれ かこ われ めぐ われしゅ な もつ これ やぶ} 彼等我を圍み、我を環りたれども、我主の名を以て之を敗れり、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
主 神 我 等 照

しゆのなによつてきたるものは、あがめほめ
主名依來者 崇讃
らる。

司祭) われし ^{なおい} 我死せず、猶 ^{しゆ} 生きて主の所爲 ^{つた} を傳えん。

しゆはかみなり、われらをてらせり、
主神 我等照
しゆのなによつてきたるものは、あがめほめ
主名依來者 崇讃
らる。

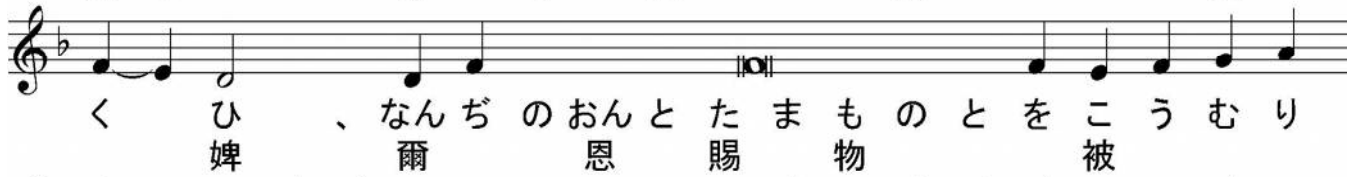
司祭) こうし ^す 工師が棄てたる石は屋隅 ^{いし} の首石 ^{おくぐう} と爲れり、此れ主の成す ^{しゆせき} 所 ^な にして、われら ^こ 等の目 ^{しゆ} に奇異 ^な な ^{ところ} りとす。 ^{われら} ^め ^{きい}

【 讃詞 第4調 】

しゆよ、われらなんぢのふとうのぼくひたるも
主 我等爾 不 當 僕 婢 者
の、なんぢのおおいなるおんをこうむるによ
爾 大 恩 被 因
りて、かんしゃのこころをいだきなんぢをと
感謝 心 抱 爾 尊
みうたいほめあげかんしゃ し、なんぢのじん
歌 讃 揚 感謝 爾 仁
じをあがめぼくのつつしみかつあいをもってなん
慈 崇 僕 慎 且 愛 以 爾



【 讃詞 第3調 】





の な り と 。

【 新年の讃詞 第2調 】



いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世 世



ときととしとおのれのけんないにおきたま
時 歳 己 権内 置 給



いしばんぶつのぞうせいしゅよ、なんぢの
萬物 造 成 主 爾



おんたくをもつてとしにこうむらせ、
恩 澤 以 年 冠 せ、



しょうしんぢよのきとうによりて、われらをへ平
生 神 女 祈 禱 因 我 等 平



いあんにももりてすくいたまえ。
安 守 救 い 給 え。

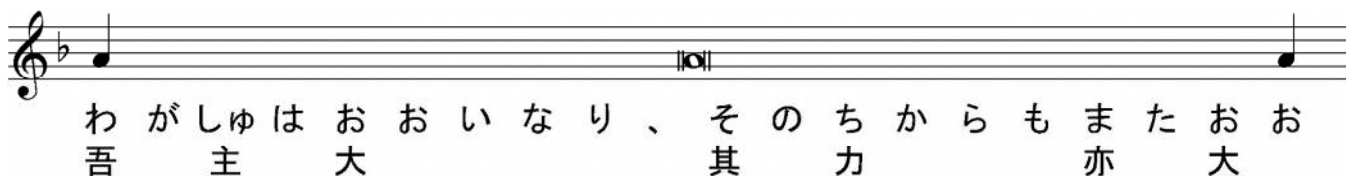
【 プロキメン 提綱 歳首の 第3調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

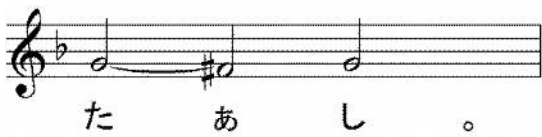
誦經) ^わ プロキメン、^{しゅ} 吾が主は ^{おお} 大なり、^{そのちから} 其力も亦 ^{また} 大なり、^{そのちえ} 其智慧は ^{はか} 測り難し、^{がた}



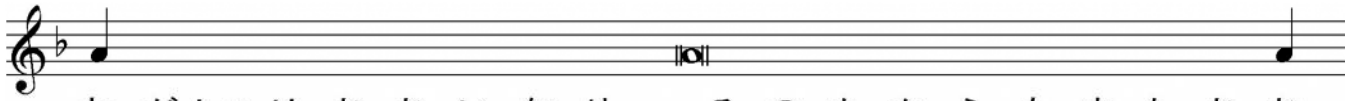
わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお
吾 主 大 其 力 亦 大



いなり、そのちえははかりが難
い な り、 其 の 智 慧 は 測 り が 難



誦經) ^{しゅ ほ あ}主を讃め揚げよ、^{けだしわれら かみ うた ぜん}蓋我等の神に歌うは善なり、^{けだしこ たのし こと}蓋是れ樂しき事なり、



わ が しゅ は お お い な り、 そ の ち か ら も ま た お お
吾 主 大 其 力 亦 大



い な り、 そ の ち え は は か り が
其 智 慧 測 難



た し 。

誦經) ^{わ しゅ おおい}吾が主は大なり、^{そのちから またおおい}其力も亦大なり、



そ の ち え は は か り が た し 。

アポστόロス

【 使徒經 282 端 ティモフェイ前書2章1~6節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パウエルがティモフェイに^{たつ}達する書^{しよ よみ}の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて聽くべし、

誦經) ^こ子ティモフェイよ、^{われおよそ こと さき}我凡の事に先だちて勸む、^{すす}衆人の爲、^{しゅうじん}帝王、^{ため ていおう}及び凡そ權を操

^{もの}る者の爲に、^{ため}祈禱、^{きとう}祈願、^{きがん}懇求、^{こんきゅう}感謝を爲さんことを、^{われら}我等が凡の敬虔と聖潔と

^{もつ}を以て平安にし、^{へいあん}穩靜なる生を度らん爲なり、^{おんせい}蓋此れ我等の救主神の前に善に

^いして納れらるる事なり、^{こと}彼は衆人が救を得、^{かれ}及び眞實を知るに至らんことを欲す。蓋

^{かみ}神は一なり、^{いつ}神と人との間には中保者も亦一なり、^{かみ}乃人ハリストス イイス、^{あいだ}

^{しゅうじん}衆人の爲に己を與えし者なり。彼に尊敬と光榮とは^{かれ}世々に歸す、^{そんけい}アミン。^{こうえい}

(比較用 口語訳) わたしの子テモテよ、まず第一に勸める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。それはわたしたち

が、安らかで静かな一生を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。これは、わたしたちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことである。神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであつて、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定められた時になされたあかしにほかならない。

【 アリルイヤ 第4調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ ほめうた おい なんぢ ぞく} 神よ、讚頌はシオンに於て爾に屬す、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ なんぢ おんたく もつ とし こうむ} 主よ、爾は恩澤を以て年に冠らす、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 13 端 4 章 16~22 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスス其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其

常例に依りて、會堂に入り、讀まんと欲して立てり。預言者イサイヤの書を彼に與うる

あり。彼は書を披きて、左に録せる所を出せり、云わく、主の神我に在り、蓋彼は我

に膏して、貧しき者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擲者に釈

を、瞽者に見ることを傳え、壓せらるる者に自由を與え、主の禧年を傳えしめたり

と。乃書を掩い、役者に與えて座せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。彼宣べ

始めて曰えり、此の爾等が聴きし所の書は今應えり。衆皆之を證し、且其口よ

り出づる恩寵の言を奇とせり。

(比較用 口語訳) それからイエスはお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆した。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

【 増聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お} 又 教 曾 を 司 る 尊 貴 なる 我 等 の 全 日 本 の 府 主 教 セ ラ フ ィ ム 、 及 び ハ リ ス ト ス に 於

^{ことごと われら けいてい ため いの} ける 悉 くの 我 等 の 兄 弟 の 爲 に 禱 る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{しゅさい しゅわれら きゅうせいしゅ われらふとう ぼくひ おそ おのの なんぢ ゆたか そのしよ} 主 宰 、 主 我 等 の 救 世 主 よ 、 我 等 不 當 の 僕 婢 と し て 、 畏 れ 戦 き 、 爾 が 豊 に 其 諸

^{ぼくひ そそ しよおん ため なんぢ じんじ かんしゃ ふふく なんぢ かみ かな さんよう} 僕 婢 に 注 ぎ た る 諸 恩 の 爲 に 爾 の 仁 慈 に 感 謝 し て 俯 伏 し 、 爾 に 神 に 適 い た る 讚 揚 を

^{たてまつ しょうかん じょう もつ よ なんぢ しよぼくひ もろもろ わざわい まぬが そのじれん} 奉 り 、 傷 感 の 情 を 以 て 呼 ぶ 、 爾 の 諸 僕 婢 を 諸 の 禍 よ り 免 し め 、 其 慈 憐

^{よ つね われらしゅうじん よ のぞみ かな たま ねつしん なんぢ いの き い} なる に 因 り て 常 に 我 等 衆 人 の 善 き 望 を 適 え 給 え 、 熱 心 に し て 爾 に 禱 る 聆 き 納 れ て

^{あわれ} 憐 め よ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{なんぢ じんじ もつ いまきた とし はじめ しゅくふく われら うち およそ ふわ ふせいり} 爾 の 仁 慈 を 以 て 今 來 り し 年 の 始 に 祝 福 し 、 我 等 の 内 に 凡 の 不 和 と 、 不 整 理 と 、


^{ふんそう おさ われら わへい けんご いつわり あい ただ せいり とくこう どせい} 紛 争 と を 治 め 、 我 等 に 和 平 と 、 堅 固 に し て 偽 な き 愛 と 、 正 し き 整 理 と 、 徳 行 の 度 生

^{たま しぜん しゅ なんぢ いの き い あわれ} と を 賜 わ ん こ と を 、 至 善 なる 主 よ 、 爾 に 禱 る 聆 き 納 れ て 憐 め よ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 去年の中に有りし我等の數え難き不法と惡事とを憶わず、我が行に由りて我等に

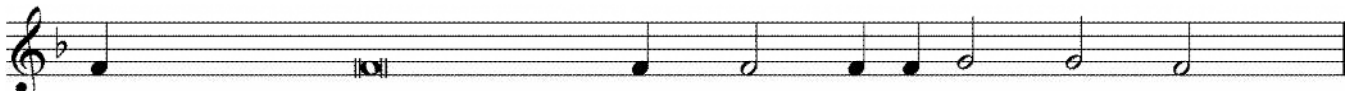
報いずして、仁愛と宏恩とを以て我等を顧ることを、慈憐なる主よ、爾に禱る聆き
納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 時に合いたる早く又晩き雨、豊稔の露、隠靜にして順和なる風を與え、日の温暖

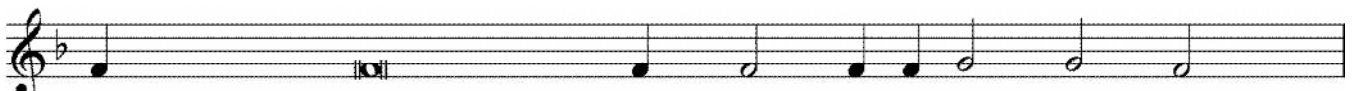
を輝かすことを、宏恩なる主よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 爾の聖なる教會を記憶して、之を強くし、之を固くし、之を弘め、之を平和に

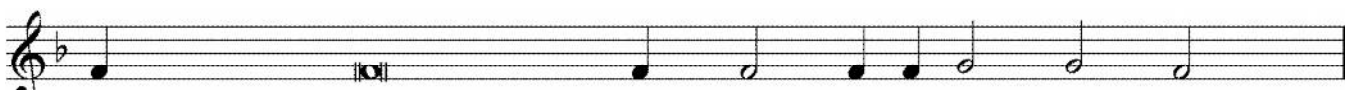
し、之を地獄の門に惱まされず、見ゆると見えざる諸敵の悉くの惡謀に破られざる者
として世に護らんことを、全能なる主宰よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 凡そ異邦の幽暗を滅して、未だ爾を知らざる諸民を眞の福音經の光にて照さ

んことを、大有能の主よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

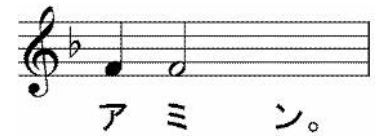
司祭) 我等に此の來りし年と、我が生命の悉くの日に於て、饑饉・疫病・地震・水難・

火難・電害・劔難・外攻・内亂及び死を招く諸害と、凡の憂愁と、危難とを免
れしめんことを、慈愛なる主よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、

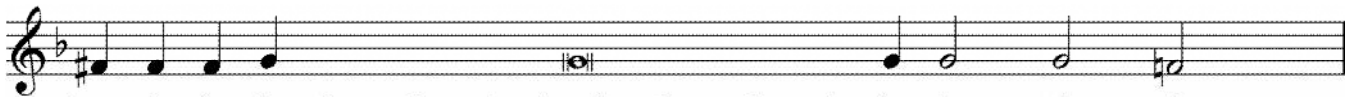


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) かみ わ きゆうせいしゅ ち しきよく とお うみ お もの たのみ われら き たま しゅさい
 神、我が救世主、地の四極と遠く海に居る者との恃よ、我等に聞き給え、主宰
 われら つみ じんじ た じんじ た われら あわれ たま けだしなんぢ じんじ ひと
 よ、我等の罪に仁慈を垂れ、仁慈を垂れて我等を憐み給え、蓋爾は仁慈にして人
 あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



司祭) われらひざ かが またまたしゅ いの
 我等膝を屈めて、復又主に禱らん、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主憐 主憐 主憐

司祭) しゅさいわれら かみ いのち ふし みなもと み み ばんぶつ ぞうせいしゅ とき とし
 主宰我等の神、生命と不死との源、見ゆると見えざる萬物の造成主、時と歳とを

おのれ けんない たも なんぢ えいち しぜん せつり もつ ばんゆう つかさど しゅ わ いのち
 己の権内に有ち、爾の睿智にて至善なる攝理を以て萬有を宰る主よ、我が生命

すぎ さ ひ おい われら あらわ なんぢ きみょう おんけい ため われらなんぢ かんしゃ
 の過ぎ去りし日に於て我等に顯しし爾の奇妙なる恩恵の爲に我等爾に感謝す。

こうおん しゅ なんぢ いの なんぢ じんじ もつ いまきた とし はじめ しゅくふく わがくに
 宏恩なる主よ、爾に禱る、爾の仁慈を以て今來りし年の始に祝福し、吾國の

てんのう まも そのいのち ひ ぞうか つね かれら そうけん ばんとく おい かれ しんぼ たま
 天皇を護り、其生命の日を増加して、常に彼等を壯健にし、萬徳に於て彼に進歩を賜

え。爾の衆民にも上より爾の善福、壯健と救贖、及び萬事に於て善き進を

あた たま なんぢ せい きょうかい こ まち ことごと まち ちほう もろもろ わざわい
 與え給え。爾の聖なる教會、此の城邑と、悉くの城邑と、地方とを諸の禍よ

のが これら へいあん おんせい たま ねがわ われら つね なんぢむげん ちち
 り脱れしめて、此等に平安と隱静とを賜え。願くは我等に常に爾無原なる父と、

なんぢ ぞくせい こ しせい いのち ほどこ なんぢ しん いったい おい さんえい かんしゃ
 爾の獨生の子と、至聖にして生命を施す爾の神、一體に於て讚榮せらるる感謝

たてまつ なんぢ しせい な ほ うた え たま
 を奉り、爾の至聖なる名を讃め歌うを得しめ給わん、

こうえい なんぢかみわれら おんしゅ よよ き
 光榮は爾神我等の恩主に世に歸す、



司祭) えいち しせい しょうしんぢよ われら すく たま
 睿智、至聖なる生神女よ、我等を救い給え、

ヘルヴィムよりと うとくセラフィムにならびなく
尊 並

さかえ、みさおをやぶらずしてかみこと
榮 貞操 壊 神 言

ばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢ
生 實 生 神女 爾

をあげめほむ。
崇 讚

司祭) ハリストス^{かみわれら たのみ}神我等の^{こうえい なんぢ き}恃よ、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ
何時 世世 主 憐 主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ
憐 主 憐 福 降

せ。

司祭) ハリストス^{われら まこと かみ}我等の^{およ しょせいじん きとう より われら あわれ すく}眞の神は、(某) 及び諸聖人の祈禱に因て我等を^{かれ ぜん}憐み救わ
ん。彼は善にして人^{ひと あい しゅ}を愛する主なればなり、

アミン。

司祭) 主よ、いまここ^{しゅ いまここ た いの なんぢ しょぼくひ ばんぷく へいあん どせい そうけん}に立ちて禱る爾の諸僕婢に、萬福にして平安なる度生、壯健と
救贖^{きゅうしょく およ ばんじ およ しんぼ あた かれら いくとせ まも たま}、及び萬事に於ける善き進歩を與えて彼等を幾歳にも護り給え、

い く と せ も 、 い く と せ も 、 い く
 幾 歳 歳 幾 歳 幾 歳
 と せ も 。 い く と せ も 、 い く
 歳 幾 歳 幾 歳
 と せ も 、 い く と せ も 。 い く
 歳 幾 歳 幾 歳
 と せ も 、 い く と せ も 、 い く と せ
 歳 幾 歳 幾 歳
 も 。

【 萬寿詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び
 神 我 國 天 皇 及
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ
 國 司 者 我 等 府 主
 き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う
 教 及 悉 正 教
 の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン 等 を 、 い く と せ に も ま も り
 給 。

— 新年感謝祈禱終了 —

※「幾年も」は他のメロディでも可。参拝者に合わせて選択してください。

【 幾年も 】

Musical score for '幾年も' (Several Years). The score is written in a single treble clef with a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of three lines of music. The lyrics are: 幾 くと せも い くと せも い くと せも. The first line ends with a repeat sign. The second line ends with a repeat sign. The third line ends with a repeat sign.

【 幾年も トルチャニノフの四部 】

Musical score for '幾年も トルチャニノフの四部' (Several Years, Four-Part Setting by Turchaninov). The score is written in a grand staff (treble and bass clefs) with a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of three systems of music. The lyrics are: 幾 くと せも い くと せも い くと せも. The first system ends with a repeat sign. The second system ends with a repeat sign. The third system ends with a repeat sign.